

藤田富士夫
(埋蔵文化財センター所長)

1 はじめに

富山市の北代地域に古くから知られた蜆ヶ森貝塚がある。遺跡地には白鬚神社が鎮座している。土器は縄文前期後葉「蜆ヶ森式土器」の標式となっている。私は昭和 56 年に遺跡の一部の発掘を担当し旧聞に過ぎるが昨年度にその概要を報告した(『富山市考古資料館紀要』第 27 号)。ここでは、その執筆のためメモしたものを備忘として記しておきたい。

2 遺跡の調査略史

(1) 江戸期の知見 白鬚神社境内では早くから貝殻の散布が知られていた。享保年間に野崎伝助(不明～1731 年)が著わした『喚起泉達録』には、「北ダイノ山ニスバメノ宮トイフアリマタスバメノ森トモ云モリノ中ニ小キ社アリ世人ノ流傳ニワ皆昔蜆貝舟ニツミ来リシニ此舟鳶トナリシヲ宮屋シキトシタリコノ鳶舟ノ形ニテ今も此森ノ中ニハシバミ貝ノカラ多アリト云フ」とある。野崎伝助は、流伝を確かめるため土を掘り起こしている。「ナル程流デンニタガハズ土ヲ掘バ舟ノナリニシバミ貝ノ空アルナリ」と記している。つづけて、伝説を紹介し、蜆貝が蝶となって機織の比売(姉倉比売)の機を織るのを手助けしたとしている(資料集成編集委員会『喚起泉達録 越中奇談集 越中資料集成 11』桂書房 2003 年/163 頁)。

この直後の享保 18(1733)年の稿による『越中旧事記』(作者不明)にも「すずめの森」として「蜆貝を乗せた舟の話」が記されているが、所伝は『喚起泉達録』を底本としているようだ。

さらに文化年間に野崎伝助の孫である野崎雅明(1757～1816 年)は、『喚起泉達録』を底本として『肯構泉達録』を著し、そこに「蜆が蝶になった話」を収録している。

遺跡に散乱する蜆貝を、舟で運ばれてきたとする伝説やその蜆貝が姉倉比売の機織を手助けし蝶となって舞ったとする美しい伝説は、『喚起泉達録』の記述がもっとも古い。江戸中期段階に、本来は存在しないであろう陸地での蜆貝散乱に対する流伝の一端を記録し、それを「土ヲ掘って」確かめたとする『喚起泉達録』の意義は大きい。

(2) 明治期以降の調査 茨城県人の吉田文俊は明治 40 年 7 月から 3 ヶ月間、越後、越中、加賀、越前を研究旅行し、その折りに富山市(当時、婦負郡長岡村)の「北代貝塚(蜆ヶ森貝塚)」を“発見”し、一部発掘を行っている。蜆ヶ森貝塚ではシジミやアカニシ、カキ、アサリなどの貝殻とともに骨角器や獣骨を認めている(吉田文俊「日本海方面の貝塚」『人類学雑誌』第 32 巻第 4 号 日本人類学会 1917 年、斎藤隆「北代遺跡と吉田文俊」『富山市考古資料館報』No.5 1981 年)。内陸に所在するこの貝塚について、「今日の富山湾は少なくとも貝塚の積成当時は此附近まで海水の浸す所であつたに相違ない」と述べ、地形変化に関心を寄せている。

高岡の北浦忠雄が明治 43 年に「越中国北代村の貝塚」(『東京人類学会雑誌』第 286 号 1910 年)で、貝層は一尺五寸余りの厚さがあると書いている。

昭和 3 年発行の東京帝国大学『日本石器時代遺物発見地名表 第五版』(岡書院 1928 年)に「長岡村・北代○蜆ヶ森、白鬚社内(貝塚)」とあり、出土品には「土器・打石斧・磨石斧・骨角器」が記されている。早川荘作の『越中史前文化』(中田書店 1936 年)では、「森然たる樹木の裡に小祠あり、其境内一面に無数の貝殻が散在し、地下深く発掘しても尚累々層を成している。其中に石器、土器が混在する。貝は主に淡水産の蜆貝である」と、その様子を記す。戦後の昭和 24 年に発足した富山考古学会調査による「富山縣石器時代遺跡地名表」(森秀雄『大昔の富山県』清明堂書店 1951 年 収載)では、「長岡村 蜆ヶ森貝塚 石斧、曲玉、玦状耳飾、石鏃、凹石、石匙、土器、人骨、獣骨」と記されている。

湊晨・林夫門・森秀雄・高岡中部高校生徒による小発掘(2坪)が昭和23年8月10日に実施されている(森秀雄『大昔の富山県』清明堂書店 1951年/18頁。棚元理一・藤田富士夫「棚元日記にみる終戦直後の富山県考古学界の動向」『大境』第27号 富山考古学会 2007年)。羽状縄文を有する土器など多数が出土している。

富山大学教授高瀬重雄に率いられた富山大学考古学同好会による発掘が昭和28年に行われ、報告書(富山大学考古学同好会編『蜆ヶ森貝塚調査報告書』富山県教育委員会 1954年)が刊行されている。それは現在でも蜆ヶ森貝塚の概要を知ることのできる唯一の報告書である。

富山県教育委員会によって貝塚南端部の緊急発掘が昭和56年6月2日から12日まで行われ、土坑3基と貼り床遺構1基が検出されている(藤田富士夫「富山県蜆ヶ森貝塚発掘調査報告(昭和56年度)」『富山県考古資料館紀要』第27号 富山県考古資料館 2008年)。

3 蜆ヶ森式土器の研究略史

出土土器は、今日、北陸の縄文前期後葉「蜆ヶ森式土器」の標式となっている。型式と編年の認定は、昭和25年11月2日～3日の東京大学理学部人類学教室の山内清男博士の来県が契機となっている(湊晨「富山県内新石器時代遺跡概観…山内先生に随行するの記…」『大境』第1号 富山考古学会 1951年)。林夫門が教諭を勤める高岡中部高校において蜆ヶ森式土器の観察がなされたという。その資料は昭和23年8月に行われた発掘資料を主としている。

森秀雄は『大昔の富山県』(清明堂書店 1951年/18頁)で、富山県の前期土器を編年し「朝日C式→蜆ヶ森式→吉峰式」を設定した。それぞれ関東の編年と比較し、朝日C式を黒浜式、蜆ヶ森式を諸磯A式、吉峰式を諸磯B式に比定している。山内博士来県に伴う型式学の知識に導かれたもので蜆ヶ森式土器の県内での研究が始まった。

高堀勝喜が北陸を担当する『縄文時代 日本の考古学Ⅱ』(河出書房新社 1965年)の巻末編年表では、北陸の前期を「極楽寺式」「朝日C式」「福浦下層式」「蜆ヶ森式」「朝日下層式」と5型式に分けている。蜆ヶ森式土器は、諸磯C式併行に置かれ、前期後葉の編年観として確立した。この図書は戦後考古学の到達点をなすものでその編年観は今日の出発点となっている。

橋本正は「蜆ヶ森貝塚採集の遺物」(『大境』第2号 富山考古学会 1966年)で、表面採集した土器をA～G類に7大別し、それぞれを1～4類に細別して、蜆ヶ森式土器が多類から構成されることを報告した。

小島俊彰は、「北陸における縄文前期末の様相」(『信濃』第20巻第4号 信濃史学会 1968年/273～274頁)で、蜆ヶ森式土器には微隆起線文を主体とするものと太い隆線を貼り付けたものがあるが、「現時点」で一括を説いた。後者の一群を東日本の諸磯B式、西日本の北白川Ⅲ式に関連付け、浮隆爪形文について諸磯C式との関連を示唆した。

高橋修宏は、小島の見通しを受けて、蜆ヶ森式土器が微隆起線文系の「蜆ヶ森Ⅰ式」と結節浮線文系の「蜆ヶ森Ⅱ式」とに時間差をもって二分できることを提唱した(高橋修宏ほか『小泉遺跡』大門町教育委員会 1982年/84～92頁)。

＊ これらの研究を経て、今日、関東地域の編年との対比では、「蜆ヶ森Ⅰ式」と「蜆ヶ森Ⅱ式」を諸磯b式古、諸磯b式新の範疇で捉えようとする見解が成されている(建石徹『日本の美術』496 至文堂 2007年/20頁)。

4 おわりに

ここに私の富山県内を主とした粗いメモを記した。もちろん蜆ヶ森式土器は、県内外(とりわけ石川県)の多くの研究者の検討によって深化してきた。ここに記せなかった研究史そして最新の到達点は小島俊彰「蜆ヶ森式土器」(『総覧縄文土器』アム・プロモーション 2008年/298～303頁)に詳しい。さらなる向学の志はそれを必見していただきたい。